

パウロの回心の話から、舞台はペトロの伝道の歩みへ移っていきます。

ペトロは、エルサレムにあるキリスト教会の責任者というような立場でしたが、すでに各地に生まれていたキリストの教会を訪ね、その地の人々を励ますとともに、それぞれの地での伝道を進めていきました。

今朝わたしたちが読みました聖書箇所には、ペトロが訪問した二つの町の教会での出来事が報告されています。最初にリダという場所で中風で八年もの間、床に就いていたアイネアという人との出会いが記されています。もう一箇所はヤッファです。ここではタビタという名前の女性の弟子の話が出てきます。

ペトロはリダを訪問し、その地にいる聖なる者、つまりキリスト者を訪問する。こういう働きを教会では問安と呼びます。もともと安否を問うという言葉ですが、教会では訪ね、信仰を確認し、励ます、という意味をこの言葉に盛っていました。それはペトロの個人的な行為ではなく、教会の行為でした。エルサレム教会が、各地にある教会を問安するのです。それは今日でも教会において行われている大切な事柄です。ペトロはリダの教会で8年にわたって病で苦しむ人と出会う。教会といっても必ずしも土地を持ち、建物を持っていたかどうかはわからない。信者の家で礼拝を守っていたのかもしれない。だがそのリダの地の教会に病気の人も連なっていた、ということなのです。元気な人や、自分で歩いて来られる人だけでない、8年も病床にある人もイエス・キリストを信じる者とされて教会に連なっていたのです。

一方、ヤッファの教会にはタビタという女性信徒がいた。女の弟子、とわざわざ書いているのは使徒言行録の中でもとても珍しい。というのも、男であれ、女であれ、キリストの弟子は「弟子」という一言で表現されていたからです。わざわざ女性の弟子と書かれているのは、タビタの女性ならではの細やかな配慮、奉仕、気働きが教会の人々の心の中に焼き付いていたからかもしれない。彼女は、教会の中でやもめたちのお世話をしていたようです。やもめというのは、夫と死別したり、離婚したりして夫のいない女性のことですが、とても社会的に厳しい生活を強いられていました。タビタはこの女性たちのために働いていた。それ以外の働きも多くなっていたかもしれない。たくさんの善い行いや施しをおこなっていた、とあるからです。そのような彼女の奉仕に生きる

姿、活発な働きは「かもしか」という彼女の名前そのままの働きだと教会の人々は思っていたのでしょう。だが、タビタは病を得て、死んでしまう。彼女がなした働きも、奉仕も、彼女の死と共になくなってしまった。やもめたちをはじめ、教会の人々は深い悲しみの中にありました。ヤッファの教会の人々はペトロがリダにいるということを聞きつけ、ペトロのもとに走り、「急いでわたしたちのところへ来てください。」と頼んだのでした。使徒であるペトロが巡回し訪問し、問安していることを聞き知って、とにかく来ていただきたいと願ったのでしょう。

先週の聖書箇所最後の、31節には各地の教会が平和を保ち、主を恐れ、基礎が固まっていったことが報告されていました。確かにそうだったでしょう。しかし同時に、教会の中には、病とか、老い、死、という避けようもない現実が問題になっていたということです。そうした現実が教会の中にも深い悲しみを呼び起こしていた、ということです。教会のその歩みはじめから、そういう現実と出会っていた。そして今日の聖書箇所は、教会が、そういう現実の中で、どう歩んだのか、ということの報告でもあるのです。

ペトロはリダでは8年間も床に就いていた人を癒す。

そしてヤッファでは死んだ女性を生き返らす。

この奇跡行為の前で、正直戸惑う自分がある、と感じる人は少なくないでしょう。初代教会ではこんなことが起こったのか。すごいなあ。今でもこんな奇跡が起こるのなら、ありがたいけれど、今はこういうことを起こらないよな、で通り過ぎてしまう人。

福音書には、イエス・キリストの奇跡行為がたくさん記されています。キリストの奇跡行為は、神の子なんだから、よくはわからないけれど、当然かもしれないけれど、一介の弟子にすぎない、というかわたしたちと基本的には何も変わらないペトロが、どうしてこんな奇跡行為を起こせたんだろうか。よくわからない、そういう率直な感想を持つ方もおられるかもしれない。

きょうの聖書箇所を読む、むずかしさがあるように思います。本当にこの聖書箇所を素通りしないで聞く、ということはどういうことなのか。何をどう受けとめたらいいのか、戸惑う人も少なくないでしょう。

ペトロは、リダではアイネアという8年にわたって寝たきりだった人に向かって、「アイネア、イエス・キリストが癒してくださる。起きなさい。自分で床

を整えなさい。」と語りました。床を整えなさい、というのは、自分で体を伸ばしなさい、という意味の言葉です。イエス・キリストがあなたを癒してください。だから、起きなさい、自分で体を伸ばしてごらんなさい、ペトロはそう呼びかけたのです。

ヤッファではもうすでに遺体となって階上の部屋に安置されたタビタのもとにペトロは歩み寄った。そして悲しみの中で泣いている人たち、思い出の品を見せる人たちを、いったん部屋の外に出して、「タビタ、起きなさい。」と呼びかけるのです。

マルコによる福音書には、キリストが死んだ少女のもとに行き、皆を外に出して、「タリタ、クム」少女よ、起きなさい、と言われた出来事が記されています。

あの時と同じ。「タビタ、起きなさい」。

アイネアの病、長い病、治らない病、そして老い、それは人を束縛していきます。病が束縛となるのは、病気は何らか、死の影を宿しているからでしょう。病気の向こう側に死が透けて見えるからです。死の力が否応なく迫ってくる。それがわたしたちを束縛するのです。

タビタの場合、すでに彼女は遺体となっているのですから、完全に死の束縛の中にある。死の力に屈服させられている。人々は、あれほど私たちのために奉仕し、仕えてくれたタビタも、死に縛り付けられ、自分たちのもともとから消え去った、そう感じているのです。

だが、ペトロは病と死の束縛の中にある人に向かって、言うべき言葉を持たない、というのではなく、言うべき言葉が与えられていた。いや、ペトロが、というのではない。教会が与えられている。それを宣べ伝えることが彼の使命だった。

教会の平和が保たれ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まり、信者の数が増えた、だがそれで教会は平穏無事、というということではない。教会が語るべき言葉、教会固有の福音を束縛の中にある人間に向かって語るべき使命を、ペトロが、また信者一人一人が、宣べ伝えていく、そういう使命の中にあるのです。

「イエス・キリストが癒してください。」「タビタ、起きなさい。」それが教会の言葉なのです。病と死、それは人間を究極束縛するものではない。病の向こうに死が見えてくる、そして最後には、死の力に人間は全面的に屈服させられ

る、そういう束縛の力の中にある人間に対して、死は死で終わるものではない。死んで、死の力に屈服させられるのではない、それが我々が語る福音の中身です。キリストはわたしたちのために死んで、三日目に甦ってくださいました。それは人の死は死で終わりではなく、死んだらずっと死に縛り付けられているというのでもなく、死んでのちも、わたしたちは神の恵みの中にあり続ける。そして、キリストは神の力によって甦った。わたしたちは死んで、この地上の生とは違う形で神のもとに置かれる。そして、神が定め給う時、わたしたちも神によって復活させられる。死んで尚、死の力に束縛されるのではない。

どんな病気であれ、神から見放された、ということは起こりえない。神はあなたと共にいてくださり、あなたと共に恵みのうちに歩んでくださる。

死んでしまったらすべてが終わり、というわけではない。どんな死も、神の御手のうちにある死であり、タビタは、神の恵みのうちにあり続ける。そしてやがて神の定め給う時、神によって復活させられる。二つの出来事はそのことを指さしている。なぜこのときこのような奇跡が起きたのか、もちろんわたしは説明できませんし、こういう奇跡が今後いつ起きるのか、それもわたしにはわかりません。しかし教会はここで起こった奇跡が指さしているものを語り伝えていく使命がある。束縛の中にある人々に向かって、それはもちろん自分自身に向かってでもあるのですが、神の福音を語っていく。

ここでペトロによって、アイネアが癒され、タビタが生き返らされた、それはペトロの力ではなく、イエス・キリストによる、神による働きです。教会はこの働きを宣べ伝えていく。わたしたちは、どんなに過酷な、どんなに重い、どんなに困難な束縛に縛り付けられているように感じていても、イエス・キリストによって担われ、解き放たれているんだ、その恵みを語っていく使命の中にあるのです。